

書評

小林 潔

『ロシアの文字の話 ことばをうつしとどめるもの』

東洋書店、2004年〔ユーラシア・ブックレット No. 57〕。

A5版 63頁：ISBN4-88595-492-4.

伊東 一郎

ロシアの文字は不思議な魅力を持っている。私がロシア語に最初に触れたのは、私が中学生のころに本で出ていた「新世界レコード」レーヴェルのロシア民謡のLPレコードで、そこに付録としてついていた民謡のロシア語の歌詞が私の見た最初のロシア文字であった。その書体がなぜか私にはひどく気に入ったのである。その歌詞を見ながらレコードを繰り返し聞いたのが私のロシア語の事始めであった。ラテン文字と同じようで微妙に違う字体（例えば к とか с）も妙に印象に残ったものである。

しかし一般的にはロシアの文字はとっつきにくい。同じスラヴ語でもラテン文字を使う西スラヴの人々はキリル文字が読めない人が多い。クロアチアのザグレブにユーゴスラヴィア崩壊前から20年近く住む私の知人はセルビア＝クロアチア語はマスターしているにもかかわらず未だにセルビアで用いられるキリル文字が読めず、ベオグラードに行くと、書いてある標識などは声に出して読んで貰う、と言っていた。

このたび出版された小林潔著『ロシアの文字の話』はロシア語そのものではなく、ロシア語の文化に、そこで用いられる文字、という視点からアプローチした類例のない好著である。ロシア語についての概説書や音韻、言語史などについての邦語で読める文献は存在するが、「文字」に焦点を当てた著作は存在しなかった。小冊子ながら本書は日本のロシア語研究者にとって貴重な文献となることだろう。

Cercle linguistique de Waseda (ed.)

Travaux du Cercle linguistique de Waseda. Vol. 8., 2004. 59 - 65

本書は10章から構成され、1章から7章まではロシア語の表記に用いられている文字の変遷を追っている。とっつきにくいロシアの文字についてのためになる、しかし楽しい情報が溢れている。

第1章「そもそもの始まり グラゴール文字とキリル文字」ではロシア文字の始まりをキュリロス（キリル）とメトディオス（メフォーディイ）の事跡から説き起こして起こしている。本書で記されているようにキリル文字はキュリロスとメトディオスの弟子たちによってブルガリアで作られたものであるが、私がブルガリアで愛国的な民俗学者から聞いた説を紹介しておこう。

それはキリル文字には漢字が起源の文字がある、というものである。それは  $\text{ш}$  と  $\text{ж}$  の字でそれぞれ「山」と「水」の字に由来する、というのだ。その根拠は、ブルガリアを建国したチュルク系遊牧民プロト＝ブルガール族が自分たちの羊の腹にタムガと呼ばれる所有印を押していたのだが、そこに漢字と似た記号が見つかった。おそらくそれは彼らがヴォルガ＝ブルガール族と分かれる前に中央アジアで知った中国起源のもので、タムガの印のために借用したのだという。キュリロスとメトディオスの弟子たちがこのようなタムガを知っていれば、ギリシア語に対応する音のないスラヴ語の音を表すために使ってもおかしくない、というわけだ。たしかに  $\text{ш}$  も  $\text{ж}$  もギリシア語に対応する音のない音価を表してはいるが、これらの文字は共に明らかにグラゴール文字を借用したものであり、グラゴール文字の  $\text{ш}$  はともかく、 $\text{ж}$  は漢字の「水」には見えない。従ってこの説は信憑性に欠ける、といわざるをえない。

さて第1章の本文について一言。現代ロシア語で用いられているキリル文字とギリシア文字の関連について言えば、教会スラヴ語キリル文字とギリシア文字の対照について説明の必要な字がいくつかあり、これについては触れていただきたかった。

まずキリル文字の  $\text{В}$  はギリシア文字のベータ  $\beta$  を借用したもののだが、音価は教会スラヴ語では  $[\text{v}]$ 、ギリシア語では  $[\text{b}]$  である。しかし教会スラヴ語では  $\beta$  を含むギリシア語からの借用語ではこの  $\beta$  に  $\text{В}$  の字をあてたために、この音を含むギリシア語起源の単語が西欧では  $[\text{b}]$  で写され、ロシア語では  $[\text{v}]$  で写される、という差異になって（たとえば symbol

に対する символ) 現れている。

また帯気音[th]をあらわすギリシア文字 θ を含むギリシア語を借用した教会スラヴ語の綴りでは、ロシア語キリル文字で θ が[f]を表す ф に合流してしまったため、都市名アテネ αθήναι がアフィーヌイ Афины に、人名テオドーロス Θεόδωρος が Феодор > フョードル Фёдор、普通名詞エーテル αἰθήρ がエフィール эфир になってしまう、という事態が起きていることに触れてもらいたかった。そもそもグラゴール文字の祖メトーディオス Μεθωδιος がロシア語でメフォーディイ Мефодий になるのも同じ理由であり、4 頁の「兄弟の名前はロシア語形ですとキリル・メフォーディーになります」という説明だけでは不親切であろう。このために 7 頁の表 2「キリル文字とギリシア文字対照表」にはもう少し丁寧な注釈が必要だったろう。

また教会スラヴ語のキリル文字と現代ロシア語のキリル文字の音価の違いなども整理しておいてもらったら助かった、と思う。これはスラヴ比較言語学に関わる問題になってくるが、たとえば教会スラヴ語 ш の音価は[ʃt]だが、ロシア語では[ʃʲtʲ]、さらには現代ロシア語では[ʃʲtʲ]にまで変化している。一方セルビア語やブルガリア語ではこの字母は教会スラヴ語 ш の音価を保っている。

また教会スラヴ語のキリル文字 Е は元来硬母音字だったが、現代ロシア語では軟母音字に変わり、硬母音字には ѣ が用いられている。この字母は本書によれば 16 世紀以降にロシア語のみに現れたものである(近代の借用語では[e]が теннис のように e で記されることが多いが)、しかしブルガリア語、セルビア語では Е は教会スラヴ語通り硬母音字であり、セルビア=クロアチア語ではロシア語の軟母音字 e に相当する音は je で表されている。

第 2 章「キリル文字とその資料」では、写本の素材が羊皮紙から紙に移行する経緯、写本を作成するために用いられた筆記用具(インク、ペン)などにも触れて欲しかった。写本の素材によって字体が変わる可能性のあることは、白樺文書についての本書の記述からも窺えるからである。

第 3 章「キリル文字のさまざまな書体」では楷書から行書、草書への字体の変遷が跡付けられる。草書の字体には明らかに文字の美術的

な価値への志向が窺え、それは「書物 = 宇宙」というバロック的理念におそらく結びついてゆく。こうなってゆくと草書は日本の書道に接近してゆき、第9章で論じられるデザインの問題と密接に関わってゆく。

第4章「活字印刷の始まり」では東スラヴにおける活字印刷の歴史が丹念に解説されている。写本の字体が活字にどのように反映し、変貌していったかがよくわかる。

第5章「18世紀の文字改革」ではピョートル大帝の時代に行われた書体・字体の改革とそれと同時に行われたキリル文字改革について述べられている。特に ѣ と ѓ の公式な字母としての登場は、他のスラヴ語にはない特徴で重要である。

教会スラヴ語を文語として取り入れたロシアはその後 17 世紀までその状態が続く。しかし民衆の口語は確実にそれとは乖離する形で発展していった。ピョートルの改革が文字改革を伴ったのは必然的なことであったが、教会スラヴ語が現代ロシア語に脱皮するには文字改革がどうしても必要だった。なおこの章では活字印刷の文字と書体に記述がしばられているが、民衆の間ではルボークのような半ば手書きの字体が通用していたことは並行して論じておくべきだったろう。また話し言葉を忠実に表記する傾向のあるこのような民衆的字体の研究によってのみ、例えば形容詞の男性・中性単数生格形語尾が -oro と綴られながら、そこでの r の字が [v] で発音されるようになったのはいつか、という問題なども解決の糸口が見えてくるはずである。

第6章「18世紀から20世紀へ——印刷書体の変遷のことなど——」ではその後の書体の変遷について語られる。この章を読むことで、現代ロシア語の表記に用いられる字体のヴァリエーションがこの時代にほぼ出そろったことが理解される。多くの図版が理解を助けてくれる。

第7章「20世紀の改革」では我々が現在目にする現代ロシア語正字法が、ロシア語の歴史的变化に取り残された旧正字法のどのような改革によって生まれたかが概観される。

この改革は多くの問題を抱えているが、例えばブルガリア語において1945年に行われた正字法の改革との対比などがなされると、興味深かるう。第二次世界大戦前まで用いられていたブルガリア語の旧正書

法では ъ のみならず教会スラヴ語で鼻母音[ǫ]を表していた字母 ѣ が [ǫ]の音価を表すために古い字体のまま使い続けられていた。

第 8 章以降ではロシアの外でのキリル文字の運命、デザインやコンピュータ・コードといった現在に即した実際的なテーマが扱われている。

第 8 章「旧ソ連内外でのロシア文字の利用」では、ルーマニア語とモルダヴィア語の例を付け加えておきたい。ロシアと同じく東方教会に属するルーマニアではその言語の表記に 18 世紀にはキリル文字を用いていたが、後にラテン文字表記に改めた。ルーマニアの一部であったモルダヴィアは第二次大戦後にソ連に編入され、モルダヴィア語の表記はキリル文字化された。ソ連崩壊後に再びモルダヴィア語の表記はラテン文字化されたのである。ロマンス語に属していながらキリル文字を用いていたのはルーマニア語のみだったからである。

この章ではできれば他の南スラヴ諸語で現在どのようにキリル文字が用いられているか、ということロシアのキリル文字と対比的に紹介してもらいたかった。それはひいてはロシア語が他の東スラヴ語や南スラヴ語と音韻論的にどのように離れていったか、を示すのに大変便利でもあるからだ。たとえばウクライナ語キリル文字の і はロシア語の и に相当するが、逆にウクライナ語の и はロシア語の ъ に相当する、同様にウクライナ語キリル文字の е は他の南スラヴ語のように硬母音字である、などなど。

また現代ブルガリア語の ѣ はロシア語の硬音符と異なり[ǫ]の音価を持つ母音字なので、これをロシア語のキリル文字に翻字する場合、ы をあてる(ブルガリア語の都市名 Търново タルノヴォはロシア語ではトゥイルノヴォ Тырново と翻字される) といった事例もある。また現代セルビア語では軟母音字はなく、ja, jy, jo のように表記され、逆に軟子音字 ъ, ѣ などがあるという事例もロシア語との対比で挙げておくべきだったろう。本書のコラム「学者たちの談義—ѣ 擁護論・й 不要論・ラテン文字化論」ではヤコブソンの й 不要論が紹介されているが、実は 17 世紀ロシアに赴いたクロアチアのスラヴ主義者クリジヤニチが構想した共通スラヴ語の表記において既に提案されていたものである。後にカラチチが定めた現代クロアチア語の正書法では実際に j の

字母が母音の後にも子音の後にも綴られ、ロシア文字の й と ъ とを兼ねている。

第9章「ロシア文字とデザイン」の章では、ヴルーベリだけでなく、ロシアのアール・ヌーヴォーを代表するイワン・ビリビンの装飾文字も紹介してもらいたかった。中世美術と民衆芸術の様式化によって彼が生み出した書体は、デザインとして扱われた一種の復古主義字体の典型を示すものだからだ。

また3章とも関連してくるが、是非17世紀の詩人シメオン・ポロツキーの手書きの図形詩にも触れていただきたかった。「書物＝宇宙」というバロック的理念は、言葉を形式的に統御する、というこの時代にロシア文学に初めて現われた文学ジャンルである「詩」の理念とも呼応しているが、それは詩の可能性をその空間的デザインにも拡大して求めたポロツキーに最もよく反映されているからだ。

第10章「ロシア文字とコンピュータ・コード」は評者の最も不得手な分野だが、ロシア研究者にとってこれからは最も重要な情報が満載されている。

最後に一言。これは「ロシアの文字」の話そのものではないのだが、この特殊なロシア文字が西欧のアルファベットにどのように翻字されるか、という優れて理論的な、また同時に実際的な問題に触れてもらいたかった、という気がする。

というのも日本の学術雑誌でもキリル文字は翻字することを強制しているものがあるし、逆に欧米のスラヴ学関連の出版物はロシア文字を翻字することを通例としているものが多いからである。

この翻字の方式には少なくとも国際式、英国式、米国式、ドイツ式、フランス式、電報における翻字法などがあり、例えば早稲田大学中央図書館では米国式（Library of Congress）で翻字してコンピュータにデータを入力している。

最初に私が私的な思い出を書いたのにも理由があって、昨今のCDでは、私が中学生の頃触れたLPレコードとは異なり、ロシア民謡も、ロシア歌曲やロシア・オペラも、ロシア語の歌詞をローマナイズして表記したものを添付していることが極めて多いからである。しかもそのローマナイズの方式もレコード会社によってまちまちで、音を重視

してアーカニエをそのままローマナイズしている音声学的表記になっている場合さえある。ロシア語を学ぶ学生が翻字のシステムを知らない、折角ロシア語の歌の CD を買って歌詞がわからない、という昨今なのである。

色々書き連ねてきたが、最初に述べたように本書はロシア語・ロシア文化に対するユニークな入門書となっている。豊富な図版は見ていても楽しく、大変役にたつ。ロシア文字嫌いの人にも是非読んでもらいたいものである。文字の壁を突破すればロシア語だけでなく、他の旧ソ連諸国の言語、スラヴ諸語の研究にも道を開くことができるのだから。

(いとう いちろう)

\*キリル文字の Е、グラゴール文字の ш, ж はそれぞれ現代ロシア字母で代用しました (編集部)。

#### Рецензия

ИТО, Ичиро *КОБАЯСИ, Кийоси* «*Roshia no toji no hanashi [Рассказ о русской азбуке]*» (Токио, 2004).